

熊本史学 第九九号 二〇一八(平成三十)年四月

徳富猪一郎と阿部充家

—大江義塾を中心として—

石倉和佳

## 徳富猪一郎と阿部充家

— 大江義塾を中心として —

石倉和佳

はじめに

本稿は、徳富猪一郎（蘇峰、一八六三—一九五七）と阿部充家（無佛、一九六二—一九三六）の同志的交流について、彼らの青年期を中心に考察するものである。阿部（神山）充家は大江義塾の教員として過ごし、以来、長く徳富と行動を共にし、後に「国民新聞」副社長、「京城日報」社長等を務めた。考察の対象とするのは、二人が初めて出会った明治十三（一八八〇）年から大江義塾解散後の明治二十（一八八七）年夏までの時期である。この時期の徳富については本人による「蘇峰自伝」他多くの伝記的記述や回顧録が残されており、研究もさかっている。その中には阿部についての言及があるものもいくつか見られる。しかし、阿部充家の伝記研究はこれまでほとんどまとまったものが出されておらず、したがって

彼の基本的な伝記的情報も整理されなままとなっている。徳富と阿部が青年期をどのように共に過ごしたかについて、史料に基づいて年代順に考察したものはほとんど見当たらない。最近では阿部充家の名は「京城日報」社長としてのみならず、朝鮮統治における親日派育成工作の重要人物としても取りざたされる。しかしそうした文脈に登場する阿部充家という人物は、多くの場合すでに「国民新聞」副社長であり、「京城日報」社長である壮年期の人物であり、その人物がいかなる青年期を過ごし人格を形成したかについての考察は消却されている。徳富と阿部の青年期の交流を考察することは、その後長く続く彼らの関係の原型を描き出すことでもある。

加えて本稿は、徳富の明治十年代の活動、特に明治十五（一八八二）年から十九（一八八六）年まで存続した大江義塾について再考するものとなる。大江義塾につい

ては、花立三郎の一連の研究が代表的なものであるが、これらを含むこれまでの論考には、少なくとも二つの問題点がある。第一に、この時期の徳富を理解するために、阿部充家が重要な役割を果たしているにもかかわらず、十分考察されてこなかったために大江義塾への理解も不十分となっているという点である。すなわち、徳富蘇峰記念館所蔵の一群の徳富宛阿部充家書簡、国立国会図書館の阿部充家関係文書、および阿部の来歴を知るために重要な史料である、昭和十一（一九三六）年に『東京日日新聞』（一月八日、夕刊）に掲載された徳富による阿部の追悼記事、「國士の風格ある老記者 阿部無佛翁」が、義塾の考察に利用されていない。第二に、明治十二（一八七九）年の教育令（いわゆる「自由教育令」）から、明治十九（一八八六）年の中学校令に至る一連の教育関係の法令、および明治十六年十二月の徴兵令改正が、義塾の運営にどのような影響を与えたかについて充分考察されてきたとは言えないことである。

大江義塾の歴史的位位置づけに関して、花立は「民権私塾」という概念に集約される徳富の教育理念を中心に論じている。花立の研究姿勢は大江義塾の教育機関としての積極的意義を明示しようとするものであり、それは色川大吉が「蘇峰にとつては大江義塾はかれの出世の踏み

台であった」と述べたような、徳富の義塾運営から東京進出を機会主義的な行動とみる見方を全面的に修正しようとするものであった。しかし大江義塾には一つの要素で総合的に捉える事が困難な面が多々ある。徳富自身の思想的成熟に加えて、人の出入りを伴う時間的経緯と教育制度上の外圧とが常に作用していたことが、大江義塾の在り方を複雑にしているのである。明治十七年から大江義塾と関係を深めた阿部充家は、その後の義塾にとって重要な存在であった。徳富と阿部の活動を明らかにすることは、私立変則中学として発足した大江義塾が、政府の中等教育制度整備の中で全国の多くの中等教育機関と同様に淘汰されようとする時代の波に、いかに対峙しようとしていたのかを浮かび上がらせることになる。

#### 一 徳富猪一郎と阿部（神山）充家の出会い

先述した徳富による「東京日日新聞」に掲載された阿部の追悼文、およびその内容を編集したとされる「肥後人名辞書」の阿部充家の項にある内容が、阿部の出自について書かれたものとしては最もまとまったものである。また、「蘇峰自伝」にも阿部との最初の出会いが記述されている。ここではこれらの史料をもとに阿部の出自、お

よび二人の出会いについて見ていきたい。徳富による「東京日日」の追悼記事には、冒頭近くに阿部の係累についての言及がある。

君は生前既に其父を喪うた。然も父の兄には、熊本の名士浅井新九郎―後に鼎泉―があつた。幼児の師には池辺吉十郎があり、其の親戚には鎌田酔石あり。

其の交遊の先輩には深野一三、辛島格あり。而して予と東京に於て相知りたるは、実に明治十三年、予十八、君十九。

阿部は熊本城下の山崎町で生まれたが、出生地が示すように彼の係累は熊本士族の人々であった。伯父の浅井新九郎（鼎泉、一八二六―一八九八）は、『肥後人名辞書』では次のようにある。「幕末天下他事の際世氏に従ひて上京し大に盡瘁する所あり。而して能く順逆を辨し一藩の名節を全からしむるに與りて力あり。後侯爵細川家家扶となる」。鼎泉の父は浅井兼次で時習館訓導、その先代は浅井新右衛門で武蔵流剣術師範であった。新九郎は幕末には京都留守居役百五十石となり、藩内の融和に奔走したという。徳富が列挙している阿部の関係する人々は、皆熊本藩士である。実際にどの程度の交流があったのかについては不明であるが、皆それぞれ名を成した人々であり、これらの人々の名は「東京日日」の読者に向けて

の饒という意味もあるだろう。

阿部の家柄が剣術指南であれば、彼は幼少期から熱心に剣術を学んだであろうし、その経歴は後に武道の盛んな薩摩の人士との交流に何らかの形で結びついたとも考えられる。幼少期池部吉十郎の元で学び、その後の彼の勉学の詳細は知られていないが、中村敬宇（正直）の同人社で学んだとされており、徳富と東京で出会った際には、同人社の学生であった可能性もある。なお中村敬宇には、明治十五年大江義塾が認可された後、徳富が訪問し揮毫を受けている。

徳富は明治十三（一八八〇）年五月から十一月まで東京に滞在した。その間の交遊については「蘇峰自伝」に詳しいが、熊本県人の在京親睦会において徳富は阿部と出会う事になる。徳富が東京に来たのは、同志社英学校における学生間の騒乱をきっかけに退学した後のことである。校長である新島襄が直接会って強く諫めるのも聞かず、徳富は東京に出走した。この滞在の期間、福地源一郎に面会を試みたり、友人と関東地方を周遊したり、その他何らかの縁があり面会を望むところには出かけて行き、岡松聖谷の紹成書院で学び、一方で姉の夫である大久保真次郎の海運会社熱につきあわされたりしていたようである。要するに徳富は、一種の青春の放浪期を過ごしてい

たのであるが、この時期に阿部と出会ったのである。

知り合った時期に、二人がどれほど親しくなったのかは良く分からない。しかし阿部の縁者や熊本での知己についての情報を、徳富は既にその時得ていたであろう。当時阿部がどのような生活をしてたのかについて知ることの出来る史料はほとんど残されていない。中村敬宇の同人社を中心とした人的ネットワークの中で、阿部はのちに自由民権運動を行う多くの人々との関係を深めたと考えられる。お互いに気脈を通ずるものを感じた二十歳前のこの二人の青年達は、しかし少なくとも出会いから何年かの間は、何がしかの心理的距離があり、また交友の範囲も異なるものであったと思われる。

徳富家は代々水俣の郷士で惣庄屋であった。父一敬（淇水）は横井小楠の弟子であり、明治初期の実学党の重要人物の一人である。明治三（一八七〇）年に藩知事細川護久は実学党を藩政の中心に据え、一敬は出仕することになったが、明治六（一八七三）年には進歩的な改革方針に対して新政府が難色をしめし、結果実学党は県政から追放された。徳富家は以後、熊本大江村にあったが、一家の財政は必ずしも順調ではなかった。徳富が東京遊学をしていた頃には、彼は長子として一家の将来設計を考えなければならぬ立場になりつつあった。『蘇峰自伝』

て、明治五年発布の学制下で多く出現していた変則中学校の整理が進みつつあった。結果として大江義塾は変則中学校として認められたものの、翌年になっても義塾の伺書にある教科書や校舎について不十分であるという文書が文部大書記官から熊本県令に送られている状態であった。新政府が進める中等教育の統一的な制度化の方向からみて、大江義塾は当初から逆風に向かっていたと考えられる。同時期に開校した済々黌は正則、変則の二課程を持っていた。

徳富が大江義塾を立ち上げてしばらく経った明治十六年頃、阿部は鹿児島宮之城にある盈進（えいしん）小学校の教師として赴任した。これは宮之城出身の宇都宮平一の紹介によるもので、宇都宮と阿部とは東京で知り合ったかと考えられる。その他九州改進黨の中心的なメンバーともなる、同じく宮之城出身の和泉邦彦や平田孫一郎、串木野の長谷場純孝らと阿部の交遊は当時からあったと考えてよいだろう。盈進小学校の前身は、安政五（一八五八）年、宮之城島津家第十五代当主島津久治によって作られた文館（学問所）である盈進館である。なお、阿部の赴任は明治十七年とされるが、明治十六年と考えるのが妥当である。明治十七年十月二十一日付の阿部から徳富への書簡の中で、「先度広段塾宿を相催候ひし。今度は

には徳富が東京から戻って家政改革をした話が書かれているが、徳富の大江義塾は、民党派の自由主義的な理念に基づく教育という面と、徳富家の殖産事業というもう一つの面があったといえる。

阿部の方はこうした事情とは家庭背景が異なっている。徳富の場合よりも史料が遥かに少なく断定できない面も多いが、徳富家が土地の人々と結びついた殖産の精神を持つ一家であったとすれば、阿部の係累は熊本藩の武士たち、即ち明治十年代には熊本に残るか各地に散るかした城下の人々である。一家の当主として塾を開き出版事業を起こす方向へ向かう徳富と、政治や言論、もしくは教育、新規事業などに自らの居場所を求めざるを得なかった、旧武家層の若者の一人であった阿部とは、おのずと出会った当初にはその関心を向ける先が異なっていたはずである。

徳富は東京から帰郷後、熊本の『東肥新報』の編集や政治結社である相愛社での活動をしながら、父一敬が中心となって運営していた共立学舎で教鞭を執った。その後大江村の自宅で塾を始め、明治十五（一八八二）年三月には大江義塾として開校し、同月「私立変則中学校設置伺書」を熊本県令に提出している。認可が下りたのは六月になってからである。明治十三年の改正教育令によつ

十一二の少年も参り人数も五十三名有之、去年に比すれば一層壮快を覚え申候」と書かれており、これはこの年の秋に子どもたちを連れて野宿をする遠足に出かけたが、昨年より多くが年長の者も含めて参加してくれて愉快である、ということである。とすれば明治十六年の秋には、阿部は宮之城にいたと考えて良いだろう。

宮之城は西南戦争の舞台となった場所の一つである。熊本から南下した新政府軍は、出水の関所を打ち破り紫尾山を越えて進軍した。宮之城では三八九名が参戦し、百六名が戦死した。前述した宇都宮平一は、明治十二年、和泉邦彦や平田孫一郎などと協力し、戦死者の遺骨収集を行い、墓標を建立した。阿部が赴任した当時、西南戦争の記憶は宮之城の人々の間にまだ強く生々しく残っていたはずである。徳富は若いころの阿部を「否藩閥軍の尤も有意なる前衛」と呼んだ。阿部に「否藩閥」の思想があったとすれば、それが最初に明確に彼の意識の中に輪郭付けられたのは、この宮之城での日々の中ではなかったかと推測される。

## 二 徴兵令改正、土佐訪問および東洋学館

明治十六年暮れに出された徴兵令の改正は、他の多く

の私立学校同様大江義塾にも動揺を与えた。この徴兵令で、官立府県立学校の生徒や卒業証書を持つ者に兵役猶予の特典が与えられた。とはいえ明治二十年前後までは、壮丁数に対する常備兵（陸軍）の数が五パーセント前後であることを考えると、誰でも年齢になれば徴兵されるということではなかった。問題なのは、教育令に規定のない「官立」学校という学校の存在が、徴兵令の中で明示されたことである。私立学校との間の明確な線引きがなされたわけで、私立学校に在学しても特典を得られないという気分は瞬く間に私立学校生の間に広まった。慶応義塾は十七年の一月までに百名の学生を減らした。福沢諭吉は『時事新報』において徴兵令に対する異議申し立てを激しく行なった。同志社英学校でも事情は同じであった。新島襄は東京の中村敬宇等を訪問し私立共闘の可能性を探り、その後文部省の森有礼から「准官立」案を引きだすまで粘り強く交渉した。徴兵猶予の特典はこれら私立学校にはなかなか与えられなかったが、それでは大江義塾はどうであったのか。徴兵令改正とともに義塾を去る学生も現れた。徳富一敬、猪一郎親子は残った塾生たちを鼓舞し結束を求めた。しかしこの時期専任教員として確認できるのは徳富父子のみであり、人材不足は明白であった。徳富が宮之城に来ていた阿部と連絡を取っ

たであろうことは十分納得できる。そして大江義塾の窮状に対して行動し、明治十七年の夏以降義塾の人的交流を一気に活発にしたのが、徳富が「交遊の天才」と呼ぶ阿部充家だったのである。

明治十七年夏、阿部は宮之城の青年達を連れて熊本に came。徳富や義塾の生徒たちと合流し、土佐を指した。この土佐行きには、後に『国民之友』で健筆を振るうことになる人見一太郎も塾生として同行していた。また後に義塾教師となる戸波易治もいた。戸波はこの土佐行きから帰ると、そのまま大江義塾にとどまった。『蘇峰自伝』によれば、彼らは別府から松山までの航路を除いて、徒歩で土佐までの行程を踏破した。宮之城の青年たちは、紫尾山を越え出水から熊本、そして阿蘇外輪山を東へ抜けて別府に到着したという。船に乗り、一行は愛媛から土佐へと向かった。

徳富が書き残した阿部との最初のエピソードが、集団を率いての政治的行動に近いものであったことは示唆的である。これ以後阿部の「交遊の天才」が発揮される際は、常に政治的な文脈がその背後にある。この旅行を最初に持ちだしたのは、徳富であるか阿部であるか分からない。阿部である可能性もあるだろう。宇都宮平一が学んだ三菱商業学校は、岩崎弥太郎のいとこである豊川良平が校

長となっており、土佐派の人脈の強いところであった。この時期土佐を訪問する動機は、徳富よりむしろ阿部の方にあったようにも思える。同年大江義塾雑誌の十月の項には、「先日來八代ノ渡瀬、薩摩ノ神山、阿蘇ノ毛利等ノ諸子ガ引続キ來遊アリケレバ塾内モ自ラ繁敷クアリタリ」とある。大江義塾では塾生が雑誌を制作していたが、この時の当番であった塾生の目には阿部は「薩摩」と映っている。彼は土佐からの帰り道にも、大江義塾に滞在したようである。

土佐行きは二人の関係をより親密なものにした。土佐への旅から帰った後、明治十七（一八八四）年秋の時期に書かれた阿部から徳富への書簡が数通残されている。十月五日付の書簡からは、徳富が義塾の運営を安定させ教育内容を充実させるために、人材確保に腐心していること、そしてそれを阿部と相談していることを知ることができる。

陳ば貴塾も日々整頓之運びに相成るらん。国家の爲め敬賀此事に候。（中略）栗原帰熊は如何。上田氏は最早や運転を始めたや。如何なる点に向て進行する、や、浅井に対しての一件は、如何なる都合に候や。幸に御配慮の段伏して奉希候。〔関係文書〕三、

一五頁）

この時にはすでに戸波易治が義塾の教員となり執務も行っていた。徳富によれば戸波は義塾の「幹部の一人」として認められていた。『栗原』は栗原武三太のことで、同時期の大江義塾雑誌「雑報」に、栗原は「不日関東南海ノ壮士ヲ将イテ來塾セラル、トカ」と書かれている（『大江義塾資料集』、五三二頁）。彼は大江義塾の教員とはならなかったが、後に民友社に合流し、その後『国民新聞』事務長となった人物である。これも阿部によって広がった人脈の一つである。「上田氏」とは上田充のことであり、共立学舎を出てから慶応義塾で学んだ人物である。土佐訪問の後、徳富は東京に赴き上田を知り教員として大江義塾に招いた。果たしてもう一人教員を得ることになったわけであるが、上田の義塾での教歴は翌年春までであった。

阿部が盈進小学校を辞職することについては、伯父浅井新九郎の許可が必要であったようである。十月五日付の書簡に、「浅井に対しての一件」とあるのはこの事である。十月二十一日付の書簡では、阿部は徳富に次のように書いている。

例の一件は浅井に一応照会し拙伯の許可を得ざれば郷の事出来兼ね候間、何れ近日浅井の都合に因て御確答可申候。若し例の一件も至急を要する事あらば生の帰を待たずして御決行被下度、勿論浅井え昭会

状は此の書状と一度に出し申候。(「関係文書」三、一六頁)

引用最初に出てくる「例の一件」は熊本に戻り大江義塾に合流する、ということであろう。伯父浅井新九郎に熊本に帰る許可を必要とする理由として、盈進小学校への奉職に際して何らかの事情があったことが考えられるが、具体的には分からない。次にある「若し例の一件も」とは別件と考えられ、この書簡のみで言及されているが、当時徳富が準備していた「私立大江義塾規則改正伺書」に阿部を教員として記載するという案と考えると状況と合致する。少しでも正則中学校に近い体裁を整えるために、徳富は教育課程を見直す努力をしていたわけであるが、実際に教員として翌十八年一月に提出された「改正伺書」に記載されたのは、徳富に加えて戸波と上田の三名であり、阿部の名は無かった。

阿部にとつての懸案は、大江義塾の教員となれば徴兵免除となるかどうかであった。明治十六年の改正徴兵令において、「官立公立学校教員」は猶予となっていたからである。教育令において「官立」の明確な定義が示されていないのであるから、逆に徴兵猶予の対象となる学校を拡大解釈する傾向も現れたと考える。十一月十四日の書簡で、阿部は浅井から返事がないことをいぶかり、

床とも考えられた大江義塾への生徒周旋など、阿部の行動は「心得」の企図とは相容れない。

同書簡で阿部は「貴塾も益基礎確固に相成候」と書いていることから、徳富からは「改正伺書」の進捗状況が報告されていると推測できる。そして、大江義塾教員となっても徴兵猶予の対象にはなりにくい旨が示唆されていたであろうことも読みとれる。というのは、阿部は「浅井に小生徴兵の一件至急尽力致しくる、横御最速被下度奉希候」と書いているからである。当面の万策尽きて最後の伯父頼み、と言うところかと考えられるが、首尾良好とは考えにくい。阿部は明治二十年までに、阿部姓の戸主となることで徴兵猶予の資格を得た。

小学校教員として過ごす中で、阿部の心は大江義塾のみならず薩摩人士の民権派の事業へも引きよせられていた。十一月十四日の書簡は、阿部が旧薩摩藩の人々と協力関係にあったことを示すものとして興味深い。阿部は長谷場純孝から急な報せを受け、手塚道(一八五八—一九四九)を清国(上海)に渡海させ、東洋学館(同年十一月からは亜細亜学館)での仕事をを行うようにさせることができないか、という打診を受けたというのである。東洋学館は九州改進黨の日下部正一、和泉邦彦、長谷場純孝、植木枝盛など土佐民権派らが主導者となって、明治十七

徳富に対して義塾教員が徴兵猶予になると分かれれば伯父が多少怒ってもかまわないので確認してほしいと書いている。

前きに例の御約束の件に付き御照会を蒙り候故直に浅井迄帰郷の許可を得る様申送り置き候処、余りに返答延引致し候故重ねて照会致し遣り候得共、於今今の返答も無御坐不審千万に候。併し徴兵の方さえ免役との事分明致し候得ば拙伯父一時の謔責位ひは耐忍仕候間、御手数ながら右免役の件御問合せ被下併せて貴塾の御都合一報奉希候。(「関係文書」三、一七頁)

この時点になると、阿部は大江義塾のために具体的な働きを始めていた。十一月三十一日付書簡では、三名ほどは宮之城から大江義塾に入学しそうであり、それが七、八名となれば大変よいだろう、と報告している(「関係文書」三、一八頁)。徳富との友情の絆が強くなっていることはもちろんであるが、阿部が小学校教員の職に執着していないことも見て取れる。明治十四(一八八二)年に出された「小学校教員心得」には、教員の政治的言動を規制する文言が入っていた。小学校教員の品性を正し倫理的な向上を目的としたこの心得は、民権活動家の言動を教育現場から払拭する機能を持っていたのである。土佐訪問や民権家との交流、外部からは自由民権運動の温

年八月に上海に開講した中国語、英語を教授する語学学校であり、当初は政治経済法学までも教授する四年制の学校として計画された。手塚は宮之城の武家に生まれた人で西南戦争に従軍した。徳富よりも五歳年長である。宮之城では大江義塾で学んだとして伝わっている。徳富が土佐訪問について述べた中にある「中には十年の役に従軍したる者もあつた」ようである、と書いているのは、この手塚道ではないかと考えられる。阿部の徳富への文面は次の通りである。

昨夜在長崎なる長谷場氏より別紙略書の通り飛報有之、当地よりも是非手塚氏の渡海を趣されたり。右同氏渡海の件に付ては小生一個の考にては力に余る所も御坐候得ば、左に愚考を陳述し大兄の指図を乞ふ所あらんと欲するなり。借て手塚氏の人物は大兄の已に熟知せらるゝ如く必ず一事を為す人には相違無御座候得共、人間閱覧の足ざるがために其志氣或は狭隘の区域内に局束せらるゝの憾なき不能候。故に今度の如き潤大なる舞台に推出させなば多少の経験も相出来、幾分か練磨せらるゝ所も有之候て前途の爲め裨益する所あり候はん耶。況んや其渡海期限も僅に四五ヶ月の日子に候得ば別段我家の事にも差障も有之間敷候に於てをや。且又た清国とは唇齒の關係上我人も對

岸の火災として看過する事能はざる事情も御座候はん。左れば前々我党の尽力を要する場合無御坐と断言も出来兼候。然れば彼の東洋館の如きも今日より予め吾党を以て占め切り置き候はゞ、其時こそ屈究なる吾党の本拠と相成り申し候はん。左候得ば今度同氏の渡海も吾党に無関係とは申されず候。〔関係文書〕三、一六一―一七頁

東洋学館が設立されたのは清仏戦争が勃発したときである。阿部が「清国とは唇齒の關係上我国人も対岸の火災として看過する事能はざる事情」があると書くのもその為である。阿部の言は東洋学館の「緒言」にある、「必ズヤ東洋諸國親和シテ以テ輔車相依リ唇齒相保ツノ大要ヲ失フ可ラズ」という主張とも呼応している。阿部は手塚がその見識を広めるために、広い世界での経験をさせることが良いだろうと書いているが、上海での活動期間が四、五カ月という点の具体的な事情は分からない。長谷場はとにかく東洋学館のスタッフとして動いてくれる人材を探したのかもしれない。阿部は東洋学館を「我党」の拠点としたいと語っているが、徳富が土佐派との連携に意欲を見せたかどうかは定かではない。

長谷場は長崎から便りをよこしているようであるが、長崎には東洋学館の事務所があった。東洋学館の実際の

意の第一義」と書いているのも、晩秋であることに加えてそうしたことに応じた気分であろう。

東洋学館の設立が企画された当初、そこには清国の人々との共同による清国の改革を目指す具体的な動きもあつたと伝わっている。東洋学館の設立に関わつた人々のアジアの人々に対する意識は、アジア主義の一つと見ることが出来る。それが徳富と阿部の同志的交流の中でどのように展開したかについては、明治から昭和初期にかけての重要な政治的水脈の一つを明らかにすることにつながるだろうが、本稿では書簡から読み取れる阿部の東洋学館との関係を指摘するにとどめる。

### 三 大江義塾における阿部充家

明治十七年十一月三十一日の書簡で、阿部は徳富に次のように書いた。

小生も前述の如く帰心矢よりに候得共、来一月頃迄は帰熊致し兼ねる情実到来せん歎の恐も御坐候得ば、当冬は是非大兄にも玉趾を挙げられ当地の諸子に御熟談被下候はゞ好都合と存候。〔関係文書〕三、一八頁

十二月、阿部の誘いに応じて、徳富は義塾生を連れて

状況は危機的なものであった。この手紙が書かれた時はすでに開学して三カ月程経っていたものの、有名無実の状態で徴兵逃れに利用する人も現れ、教育施設としてほとんど機能していなかったのである。再建の任に当たるために少し前に上海に赴任した人々の中には、宇都宮平一がいた。長谷場の阿部への依頼も、宇都宮を助ける人材を送るといふ趣旨であったとも考えられる。実際手塚は後年、宇都宮が第一回衆議院選挙に立候補し当選した際には選挙運動を手伝っている。阿部が徳富に意見を求めているのは、判断しかねる部分があつたからであろうが、特にこの書簡で費用面での言及がないところを見ると、渡航費は自分で賄う話だったかも知れない。

徳富は間をおかずに返信をしたらしく、十一月三十一日の阿部の徳富への書簡には、「清国渡海一件については直に御懇切なる指教を辱ふし、疑団氷解暗夜に燈を得たる心地致し候」〔関係文書〕三、一八頁と書かれている。その後亜細亞学館と学校名を変更し再起を図つたが、この学校には遂に日本政府からの正式な許可は降りず翌年には閉校となつた。徳富の書簡の内容は不明であるが、恐らく財政上の見通しの暗さや清仏戦争の今後の影響などを考えれば、暫し臥薪嘗胆といったアドバイスではなかつたかと推測される。同書簡の冒頭で、阿部が「吾党冬用

鹿兒島に赴いた。野口岩太郎による「大江義塾沿革誌」には「十二月又大挙シテ薩隅二遊ブ。各郷至ル所皆傾蓋互ニ滴腔ノ精神を吐露セザルハナシ」〔大江義塾資料集〕、三二―三八頁とある。そして彼が義塾に戻つたのは翌二月二十七日であつた。徳富は、塾生たちと「薩隅」、すなわち宮之城の阿部を訪ね、その足で阿部と共に串木野の長谷場などを訪ねたと考えられる。宮之城の手塚道が、地元では大江義塾で学んだと伝わっているのも、徳富や多くの義塾生が訪問したことが影響しているのだろう。一月、阿部が同行できる時を待って、徳富が串木野に向かつたと考えれば長期の薩摩回遊も領ける。阿部がいつ大江義塾に来たのか、また教員として教え始めたのか、大江義塾関係の史料では判然としないうところがあるが、同行した義塾生から見れば、年末に阿部と交流した際に阿部が来ることは分かっていただろう。そして「沿革誌」には次のように記述されるのである。

神山充家氏夙ニ宮城ニ遊ビ居ルコト数年、交遊各郷ニ洽シ。宮城、串木野、桶脇ノ諸郷ト殊ニ親密ノ交際ヲ結ブニ至ルハ、氏の力多キニ居ル。氏後久シカラズシテ本塾ニ来リ、親シク塾務ニ関シ画策スル所極メテ多矣。此時ヨリシテ四方西遊ノ士、苟モ主義ヲ同ウスルモノハ、必ズ本塾ヲ過リ宿シテ去ラザ

ルモノナシ。〔大江義塾資料集〕、三二八頁)

阿部は十一月三十一日の徳富宛書簡で、自分を「有為活発なる舞台」に上らせてほしい、「一時も早く帰熊致し大兄の緻密にして偉大なる指図の下に働かば、高杉東行の十分の一の効位ひは奏し申さん歟と心竊に期し居申候」〔関係文書〕三、一八頁)と書いた。薩摩行きはこの手始めと見てよい。そして大江義塾にとどまってからは、生徒に剣術を教え、兎狩りを行い、「大江塾の夜襲反撃隊長阿部」として、濟々鬻との喧嘩に一肌脱ぐことになる。宮城康喜の回想録には次のようにある。「それから阿部充家先生此の方は只今申しますならば舎監みた様な役目でありませぬけれどもさうやかましい事は言はれませぬが、唯撃剣等は随分猛烈に行はれて居ました。又当時の野外運動とも言ふべき兎狩り等は殊に盛んに行はれたのであります」。また、「私は年少の頃で棍棒を取って立った事はありませぬけれども、上級生の話では先方から夜襲されたり又此方から仕返ししたりした事が何回もあつた様であります」ということである(『大江義塾資料集』、八六五―八六六頁)。大江義塾には舎監といった役割はない。「舎監みた様な役目」というのは、宮之城から来た塾生などの後見人として世話を焼き、他の寄宿する塾生らの指導も行っていたことだからだろう。阿部の教育的役割を現代風

ない。夏になって再度の訪問をしているところを見ると、よほど長谷場と意気投合したかとも見える。鹿兒島藩の郷土で私学校から西南戦争に参加、その後も申木野の在所を離れずに鹿兒島県政に携っていた長谷場は、徳富の家とも阿部の背景とも通じるものがあることは確かであった。

#### 四 明治十八年以降の大江義塾―中学校令と義塾解散

明治十八年地月、大江義塾は「私立大江義塾規則改正何書」を提出した。この時から、さらに教育課程を整備し教育機関としての充実を図る時であつたとして、花立三郎は「大飛躍の年」と位置づけている。確かに義塾の体制は以前よりは充実していた。生徒の数も徐々に増えていた。しかし徳富が「自伝」に書くように、「濟々鬻は御用学校であつて、官符その他凡有る方面の力を利用し、吾は唯だ吾等限りの力であるから、とても競争すべくもなく、唯だやうやくその独立を維持して、体面を保つ迄の事であつた」というのも事実であつた。財政的なことからこの点は明白である。濟々鬻には明治十六年に明治天皇から五百円が下賜され、徳富一敬が仕えた細川護久はその後三千円を寄付している。濟々鬻が年間支出

に言えば体育や生徒指導の教官といったところである。当時、武道は体育から除外されていたが、随意科目として武道を行う学校も見られた。

阿部が大江義塾に合流したあと、各地の政党や結社との交流も増えた。明治十八年四月八日には、阿部以下何人かの塾生が福岡玄洋社を訪問し、五月十日には九州改進黨大会に出席した玄洋社の大野鴻志、小幡篤次郎が三日間義塾に滞在している。すでに前年に自由党は解散しており、立憲改進黨も事実上の活動停止状態であつた。九州改進黨はこのとき解党を決定している。八月上旬には徳富、阿部、そして塾生何人かで鹿兒島の申木野に長谷場を訪ねている。前述した手塚の件はその後沙汰聞になつたかと思われるが、事の顛末はこのときにはほぼ明らかになつていた。亜細亜学館は財政難に陥つたが借財がかさみ廃校にするにも問題が残つていたが、その借財については大隈重信が援助することで無事解散した。この年の暮れには、徳富と阿部は八代の日奈久温泉に投宿した。八代の大江義塾関係者等の交流があつたかと推測される。

明治十七年暮れから翌年二月にかけての薩摩滞在は、徳富と阿部にとつて土佐訪問に続く政治的要素の強い集団的行動であると見てよいが、具体的な記録は残されておらず。額二万円以上計上しているときに、大江義塾は二百六十四円であつたのである。教科の詳細に立ち入ることは本稿の範囲を越えるが、「改正何書」の内容は、変則中学の教育課程の見直しである。教員も増え、本科、予科、英学科と揃えたが、人員、校舎、教科課程等の面において、当時の中等教育機関として特筆すべき要素は殆ど見られない。別な見方をすれば、「改正何書」は対外的な体裁を整えるためのものであり、義塾の本懐は自主独立の精神を育成し弁舌し評論を記し、教員生徒が共に学ぶ処にあつたと考えられる。

阿部が各地の政治結社との間の人的ネットワークを温めている間に、徳富の取つた行動は文章によつて議論を興すことであつた。青年の教育についての意見を開陳した『第十九世紀日本の青年および其教育』を執筆し、六月には私家版として上梓した。徳富はこの中で、青年の教育を「政府ニノミ放任スルハ、決シテ世の有志家タルモノノ安心ス可所ニアラス」とし、自然に観察し得る因果関係を観察しその摂理を学び、自らの権利と義務を知り社会に対する責任を自覚する人間を養うことが必要であると説く。そしてそのような教育を担うものとして、「新主義ヲ以テ組織シタル私立学校」の設立が現在の日本に必要であると次のように訴えるのである。

彼ノ青年輩ヲシテ唯泰西的ノ普通学科ヲ修メ、若クハ専門ノ科学ニ就シメ、技能才識アル人トナラシムルニ止ラス、復タ大ニ其ノ思想ヲシテ高尚ナラシメ、其ノ精神ヲシテ活発ナラシメ、其ノ志気ヲシテ遠大ナラシメ、其ノ品行ヲシテ端嚴ナラシメ所謂真理ヲ求メ真理ニシタガヒ真理ヲ行ハシムル所ノ人物ヲ必要トナスノ時節ニシテ、而シテ此ノ必要ニ応スル人物を陶鑄スルハ、官立私立各其ノ長短アリト雖モ寧ロ私立学校ヲ以テ優レリトセサルヲ得サレハナリ。

私立学校は生徒を精神的に陶冶する役割の上で優れていると説く徳富の議論は、その後同志社大学設立運動の理念に発展した。大江義塾の困難を予見し私立学校の将来を熟考した中で生み出された理念とそれを語る修辭が、明治二十一年、新島襄が徳富に執筆を依頼し、全国の新聞に掲載された「同志社大学設立の旨意」の次の部分にも見いだせることは興味深い。

其目的とする所ハ、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尚ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出さんことを勉めたりき。<sup>93</sup>

徳富が同志社を退学して熊本に戻った経緯も影響してか、

るのか明治十八年の徳富には分からなかった。十一月、熊本八代の宮原町にあった分校の一つである忠士館に行くことを考えていた人見一太郎に、徳富は熊本に留まるように長々と手紙で説得し、「試に足下の熊本にある半歳若しくは一歳とせよ。宮原に雌伏する日に換るに、熊本に雄飛するの日を以せよ」とまで書いている。徳富は彼の補佐役として人見を手元に置いておきたかったのである。翌年春、明治十九年四月十日、中学校令が發布された。森有礼による諸学校令の一つである中学校令は、その後の中等教育の根幹を決定づけたものと見なされている。全国を五区に分けそれぞれに高等中学校を設置、各府県に尋常中学校を設置するとし、文部省による教科書検定も明記されたこの法令は、実質的に変則中学の全面的な整理を要求していた。徳富は、制度上中等教育機関としての明確な地位を与えられず、ざるざる各種学校として存続する道をとらず、即時の自主的解散を目指した。この時徳富は「将来之日本」の執筆を猛然と進めていた。言論によってここで世に出るのでなければ、新政府の制度改革とともに熊本の地の自由主義、民権派の教育が消え、義塾運営の努力も青年結社となりつつある塾生たちの人材も無為となってしまう、と考えるのは当然である。

『将来之日本』は大江義塾の存在意義を全面的に背負った

大江義塾の教育と同志社との関連はこれまであまり掘り下げられていない。しかし徳富が説く理念としての私立学校という意味では、徳富の中では連続したものとして捉えられていたと考えて良い。詳細に立ち入ることは本稿の射程を越えるが、大江義塾で養われた教育の理念は義塾解散とともに消えたのではなく、同志社大学設立運動に昇華されて継続したとみるべきであろう。

【第十九世紀日本の青年および其教育】を書きあげた後、徳富は大江義塾内の結束を呼び掛ける「訓辭」を作り、義塾内の精神的統一を呼びかけた。これについてはこれまで、結果として「大江社」が結束され思想集団として形成されたとみる見方や、大江義塾に集った生徒たちの中に、徳富の思想に反発するものが現れていたといった捉え方がある。どちらもある程度正しいと思われるが、義塾閉鎖から東京移住までの驚くほど迅速な対応を視野に入れた場合、熊本での教育事業からの撤退に備えて、いわば軍紀の引き締めをしているのだとまずは考えるのが妥当である。少数主義に基づく精神的統一を徹底させることで、去るものを去らせ、義塾への不満、悪口、批判、露悪的流言が義塾内部から広がるのを防ぎ、一方で残った塾生たちの志気を高め、自主独立と協同の精神を共に称揚するのである。しかしその撤退の時が実際何時であ

形で執筆されたと言つてよい。この著作は、大江義塾時代、自ら教えながら学んだイギリスの経済思想や社会思想、英米の歴史学等の知識を背景とした徳富の思想的成長によって可能になった著作である。大江義塾の教育課程が政府の中等教育改革方針に合わないものであったとしても、その教育が目指す新しい人物像は、意欲を以て新しい日本を作る働きをする主体的人間であり、そのような人材が将来必要であることは政府法令の如何で変動するものではない。

この年の夏、徳富は「将来之日本」の原稿を携えて人見と共に東京に出た。九月、人見を熊本に返し義塾解散を告げさせた。これをスムーズに運ばせるために、父一敬は塾生たちに「機今日ニアリ」と今こそ義塾を閉じて各人飛躍するときであると励ました（『大江義塾資料集』、三三〇頁）。そして、「将来之日本」が十月に商業出版として世に出ることになったときには、大江義塾はすでに閉じられていたのである。

明治十八年以降、大江義塾の教員、生徒として徳富の傍らにいた青年たちの多くは、その後の彼の言論、出版活動を支えることになる。阿部の友人であり、義塾の教員として徳富を支えた戸波易治についてここで記したい。戸波についてはこれまでほとんどまったく考察がないが、

大江義塾の記録によると熊本八代の士族であった。戸波には病気があり、その後東京には出ず、当初阿蘇地方の小学教員の職を考えたようである。その後の阿部の書簡からは、明治二十年の夏以降、戸波の状況を気にかけているのが分かる。明治二十三年十一月十七日付けの戸波からの阿部宛の書簡が残されている。発信元は菱刈郡（鹿児島県）であり、その手紙は菱刈村役場の用箋に綴られている。この手紙の中で、戸波は八月に大病をし、その後回復が遅れたが、阿部からの便りにやと十一月になって返信していると書いている。文中には自由党や立憲改進黨の話題が綴られているが、自省的な文言が散見し、彼によれば「小生ハ天下ノ一浮浪人トシテ不羈不察ノ随民トシテ遊民トシテ水草ヲ追フテ当地に漂白スル者ニ候」ということである。文末には、「大兄ナドノ驥尾ニ取リツキ葉ニ一花咲セズラント覚悟候ニ付天地間戸波易治ト云フ一ツノ動物ガ存在するヲ忘レ給ハテ必ズ羽書ヲ飛ばシ給ハレガしと祈上候」と綴られている。一所不在の趣のある戸波の自己告白は、病のために大江義塾の人々と離れてしまったことへの残念な思いがにじみ出るのであるが、その中でも特に阿部は戸波にとって懐かしく頼りになる好漢であったのだろう。

一家を上げて上京した後、同志社の先輩である小崎弘一報申上げ候事と被存候」（二十頁）と、義塾の人々の動向への目配りも見せている。そして彼は、昨今では「國民之友」が当地で政論を作っているという評判だと書く。当時の阿部の期待は徳富の政界進出にあったようにも見え、阿部の政治活動については別考察が必要だろう。

#### おわりに

ここまで、徳富猪一郎と阿部充家の青年期の出会いから大江義塾の時代までを、阿部の書簡や教育に関する制度との関係を視野に入れて考察した。阿部の青年期についてこれまで考察されてこなかった史料を用いて徳富との交流を描きだすことは、阿部の人物理解もさることながら、明治十七年以降の大江義塾についてさらに理解を深めることになったと考えられる。明治十六年暮れに改正された徴兵令が明記した「官立」学校の存在は、その後の政府主導の教育改革の先触れともなるものであった。その後大江義塾は、明治十九年の中学校令で継続困難が明白となる。しかしその間、阿部が合流した時点から、入学者は増え義塾には後に徳富を支える人々が集結するようになつた。教育課程や教育設備が不十分で、徳富の奮闘で持ちこたえている義塾の在り様に、阿部は多くの人々

道が開いた教会がある赤坂靈南坂近くに、徳富家は間借りして住むことになった。民友社を立ち上げ、「國民之友」を創刊した。多くの大江義塾の主要なメンバーが民友社で活動したのに対して、阿部の行動は別だった。彼は九州一帯を回り、各地の情報を集め政治的動向を探っていた。翌年、熊本に戻り「学校熱」が最高潮である、と濟々費について次のように徳富に報告している。「御承知の如く高等中学校の位置当地に決定したるより、濟々費を以て其予備校に充つる企画ありとは御同様會て耳に「し」たる事も有之候ひし次第なり」（七月十九日付「関係文書」三、一九頁）。濟々費は前年九月に学科改編を行い、学生の進路を高等中学か陸海軍士官学校への進学とし、それは官公立と同等の学校として認定を受けることにつながったようである。阿部は、佐々友房が資金三万五千円を濟々費拡充のため用立てようとした話、それが頓挫すると仲間を求め画策していたが、そうした動きに実学連が医学校を持ち上げ対抗しようとしていると書いている。高等中学校（第五高等中学校）が熊本に作られたことに、中等教育関係者は色めきだっているのである。この書簡は中学校令発布後の熊本での顛末を語るものであり、義塾閉校の首尾を確認しているようでもある。阿部は「大江連中の事未だ委細承わらず」、「何れ内山「義質」より御

の訪問を促し義塾生との交流を図ることで活気を与えたのである。義塾生に剣術を教え兎狩りに連れ出し、時には奇兵隊長よろしく生徒を率いて濟々費の人々と対決に行く阿部の姿は、状況をすべて勘案すれば頼りになる徳富の片腕であった。

本稿では、徳富と阿部の関係について、二人の書簡を主に考察した。明治十八年から翌年の義塾解散の時期までは、現在のところ利用できる書簡は確認できないので、大江義塾関係の史料に基づいた考察となっている。徳富が、「第十九世紀日本の青年および其教育」を世に出し、「将来之日本」の構想を練り執筆に向かう間、阿部は各地の民権家とのつながりを深めていたと考えられるが、徳富が文で立つ人材であったとすれば、阿部は人と交わり、情報を収集することで種々権力の動向に機敏であろうとしていた。大江義塾が早晩万事休すであるという予見のもと、徳富は当時彼が持ちえたほとんどすべての力を使って文章に向かっていたが、その理由もそして将来のことも理解しながら朋友として精神的に徳富を支えたのは、まずは阿部であったかと考えられる。

#### 注

（一）阿部は明治二十年ごろまでは神山充家と名乗っていた。本稿本文中では「阿部充家」として言及する。

(2) 花立三郎の「大江義塾——民権私塾の教育と思想」(ベリ  
かん社、一九八二年) および「徳富蘇峰と大江義塾」(ベリ  
かん社、一九八二年) に加えて、杉井六郎の「徳富蘇峰の研  
究」(法政大学出版局、一九七七年) および「民友社の背景  
とその成立」(「民友社の研究」、同志社大学人文科学研究所  
編、雄山閣、一九七七、一六一—一七七頁)、加えて米原謙「徳  
富蘇峰——日本ナショナリズムの軌跡」(中公新書、二〇〇三  
年) にこの時期の徳富に関する言及がある。

(3) 阿部の青年期までの履歴については、種々の文書において  
誤謬を見受ける。たとえば、国立国会図書館の阿部充家関係  
文書の解説文にある略歴にも「同志社に学び」と誤って記  
載されている。

(4) 阿部が「京城日報」社長であった時期に関する研究とし  
て、斐玲美「朝鮮総督府斎藤実と阿部充家による朝鮮人留学  
生「支援」」(「日韓相互認識」、四号、二〇一一年、一—二七  
頁)、金泰賢「朝鮮における在留日本人社会と日本人経営新  
聞」(神戸大学学位論文、二〇一一年) が、そして禅宗に造  
詣が深かった阿部との関係では、孫知恵「植民地朝鮮におけ  
る中村健太郎と朝鮮仏教団の活動とその意義」(「東アジア文  
化交渉研究」、九号、二〇一六年、二八三—三〇三頁) があ  
る。

(5) 神奈川県二宮にある徳富蘇峰記念館に所蔵されている書簡  
の一部は、「徳富蘇峰関係文書」(近代日本史料選書七、酒田  
正敏他編、全三巻、山川出版社、一九八七年) にあり、阿部  
書簡は第三巻に収録されている。「東京日日新聞」に掲載さ  
れた徳富の追悼記事は、管見によれば再録されたことがない。  
この徳富の記事は、全体として修辭的な要素が強いもので、  
若干の詩的な高揚とともに書かれたように見える。全文で一

清濁合せ呑むの雅量は、君の長處では無った。若し其の  
趣味と嗜好を挙げん乎、飲を解せざるも食を解した。又  
た収集癖も濃であつた。書畫、書籍、器玩の類より囲碁、  
旅行等に至る、其の範圍は比較的廣汎であつたが、然も  
其の初戀は政治にして、其晩戀は朝鮮。而して其の始終  
一貫したる耐久朋は、實に日本帝國であつた。

君は熊本新聞に幹たり、京城日報に社長たり、國民新聞  
に副社長たり。然も皆な是れ予との所縁に繋がりたるも  
の。而して國民新聞の二度の焼打事件には、君は二度共  
に身を挺して、雲霞の如き群集を相手に、白兵戦を試み  
た。予は今尚ほ之を以て君が俠血の迸發したるものとし  
て感激の情に禁へない。然も是れ只だ君の片鱗に過ぎな  
い。所謂る國士の風格ある、新聞記者は、君に於て之を  
見る(「東京日日新聞」昭和十一年一月八日 夕刊 旧  
字体そのまま、原文のルビは省略)。

また、李光洙の「無佛翁の憶出」(「京城日報」、一九三九年、  
三月十一日から十七日三月、夕刊)の十六日の回には徳富の  
記事への言及があり、徳富の阿部の葬儀での弔辭の内容を映  
射していることである。李の記事は阿部の回想記として重  
要なものの一つである。

(6) 星野美雪「私立「大江義塾」の教育活動とその特質」  
「教育学研究」、四四巻、一九七七年、三三—四四五頁)は、大  
江義塾の教育活動の義塾閉鎖までの経緯を教育史の観点から  
整理したものであるが、義塾に関わつた重要な人々への考察  
は看過されている。

(7) 色川大吉「徳富蘇峰論(一)」(「歴史評論」、九四巻、三七—  
五九頁、一九五八年) 四八頁。

(8) 「肥後人名辭書」(角田政治編、肥後地歴叢書刊行會、一九

つの作品として読めると考えられるので、本文中に引用した  
部分を除いて、全文記載する。

明治二十年頃から、大正の初期にかけては、新聞記者界  
に、阿部充家あるを知らぬものは無った。凡そ日本に於  
ける新聞界の事件ある毎に、君の名は世間に喧傳せられ  
た。それよりも寧ろ同業者間には更らに喧傳せられた。

(中略、本文に引用あり)

若し君の志にして、功名富貴に専らならしめば、榮達の  
途は、決して難くなかつた。君は眉目秀麗にして稟質俊  
敏。事に幹たるの材と、人に得らるゝの資とに饒かであつ  
た。官吏となるの便もあつた。實業家となるの道もあつ  
た。在野の政客として、立身する方法もあつた。けれど  
も君や其志恒に國家に急して其身を顧みるに遑あらなかつ  
た。

明治二十年前後より日清戦争までは、否藩閩軍の尤も有  
意なる前衛であつた。日清戦争以後朝鮮併合までは、尤  
も熱心なる大日本膨張論の急先鋒であつた。其の晩節に  
至りては、其の全心全力を、朝鮮同胞の爲めに効した。  
而して其の一生を通じて、富貴に汲々たらず、貧賤に威々  
たらず、只だ其志を行ふを以て、自ら足れりとした。そ  
の爲めに君の一生は、所謂縁の下の方持に了つた。

君は勝海舟の門下に誨を受け、中年以降は楞伽羅宋演、  
踏頂窟宗海等に参じ、其の交遊の範圍も、亦た此の方面  
に擴張せられた。而して所謂る政友であり、且つ親友で  
あつた諸士は、朝野にすくなくあつたが、其の重なる  
一人は、本文の記者以外には、野田大塊であつた。

君は交遊の天才であつた。人一人たび君と相知れば、一生  
相契るを禁ずる能はざらしめた。但だ性廉直にして狷介、

三六年)の「阿部無佛」(阿部充家)の項は花立前掲「大江  
義塾——民権私塾の教育と思想」、二三—四頁に引用がある。  
この内容は「東京日日」の記事を参考にしたとあるが、編者  
が改変しており、徳富の文章の名残はほとんど見られない。

(9) 浅井家と「神山」の関係であるが、川口恭子「細川家  
略系譜」(熊本藩政史研究会、一九八三年)には神山姓とし  
て神山讓(一八三六—一八九二)があり、幕末の熊本藩で浅  
井新九郎と同格の武士であつた。阿部充家関係文書に阿部宛  
ての神山讓の長男と考えられる神山潤「閩」次からの書簡が  
ある。浅井家と神山家は姻戚関係があつたと推測しうるが  
それ以上の詳細は不明である。

(10) 浅井家については、前掲「肥後人名辭書」、および川口前  
掲「細川家臣略系譜」を参照した。

(11) 徳富猪一郎「蘇峰自伝」(中央公論社、一九三五年)、一三  
四頁には「今日の阿部無佛翁、即ち当時の神山充家氏等とも  
相知るに至つた」とある。

(12) 徳富前掲「蘇峰自伝」、一五一頁。

(13) 花立前掲「大江義塾——民権私塾の教育と思想」、三〇—  
三一頁に、文部大書記官からの通達が再録されている。清々  
費の教育課程については、「新熊本市中史」(通史編、第五巻、  
近代Ⅰ、新熊本史編纂委員会、二〇〇一年) 参照。

(14) 徳富猪一郎「蘇翁感銘録」(實雲舎、配給元日本出版配給  
統制株式会社、一九四四年) 三一—四—三—五頁参照。盈進小  
学校のHPにある年譜では、明治十七年頃は「盈進学校」と  
いう名称であつたとあるが、本稿では通称として「盈進小学  
校」の名称を用いる。盈進とは孟子の「離婁下」にある「源  
泉混混不舍晝夜盈科而後進放乎四海」(げんせんはこんこん  
としてちゅうやをおかずあなにみちてしかるのちにすすみて

しかいにいたる）からとったものである。明治二十年には盈進高等尋常小学校となった。

- (15) 宇都宮平一が阿部を盈進小学校に紹介した点については、二〇一七年宮之城歴史資料センター夏季企画展「西南戦争一四〇年 さつま町と西南戦争」展示資料による。宇都宮は薩摩藩校で学び、西南戦争に従軍したが特赦を受けて盈進小学校の教師になった。その後東京に出て三菱商業学校で経済学を学んだが、同時に中村敬宇門下とも伝わる。『明治新立志編』（篠田正作編、鍾美堂、一八九一年）および「宮之城人物伝」（宮之城史談会編纂委員会、第一集、一九八三年）参照。

- (16) 阿部については花立前掲「大江義塾―民権私塾の教育と思想」、一三四―一四五頁に言及がある。花立は阿部が十八年一月以降に教員となったと推測しているが、徳富蘇峰記念館所蔵の書簡類は見えない。

- (17) 『徳富蘇峰関係文書』（近代日本史料選書七、酒田正敏他編、山川出版社、一九八七年）三、一六頁。以下、「関係文書」とし、巻数とページ数を本文中に示す。

- (18) 宮之城歴史資料センター夏季企画展の展示、「明治十年丁丑役従軍者姓名碑」（楠木神社内）による。宇都宮平一（二〇）、和泉邦彦（二九）らは宮之城私学校校長とある。

- (19) 前掲「東京日日新聞」、注5参照。  
(20) 加藤陽子「徴兵制と近代日本一八六八―一九四五」（吉川弘文館、一九九六年）二〇頁の「現役徴集人数（陸軍）」を参考にした。

- (21) 塩入隆「明治一六年の徴兵令改正と教育」（長野工業高等専門学校紀要、二号、一九六七年、一六五―一七六頁）参照。『慶応義塾五十年史』（慶応義塾、一九〇七年）には福沢

為である、とのことである。古い話であり正確でないかもしれないとのことであるが、諸状況を鑑みると戸主となって徴兵猶予となったと考えて良い。何故「阿部」という姓であるか等の詳細は不明である。なお、明治初期には徴兵忌避はむしろ一般的なことであり、懲役逃れのための指南書なども出回っていた。

- (30) 東洋学館（のちの亜細亜学館）については、佐々博雄「清仏戦争と上海東洋学館の設立」（国土館大学文学部人文学会紀要）、五五―七六頁、一九八〇年）に包括的な考察がある。また、大阪経済大学の杉田定一関係文書のなかで、「東洋学館規程約一覽」（明治十七年八月七日）の原本があり、HP上で公開されている。

- (31) 花立前掲「実学党と宮之城」には手塚の子息が、父が徳富と親しかった旨を話したとある（二頁）。手塚はのちに県会議員となり、その後長く村長として奉職した。前掲「宮之城人物伝」、一六五―一六六頁参照。

- (32) 前掲「東洋学館規程約一覽」参照。  
(33) 明治十六年の徴兵令では、「學術修業ノ為メ外国ニ寄留スル者」に徴兵猶予が与えられていた。「法令全書 明治十六年」（内閣官報局、一八八七年）、七七頁。

- (34) 佐々「清仏戦争と上海東洋学館の設立」、六五―六八頁には、清国の民衆運動を組織した哥老会という団体があり、東洋学館設立に関与した日本人の多くが関係していたという指摘がある。

- (35) 早川喜代次「徳富蘇峰」（徳富蘇峰伝記編纂会、一九六八年）一九四頁。

- (36) こうした事例の一つとして、森田信博「明治期秋田県における武道の奨励について」（秋田大学教育文化学部研究紀要、

が明治十七年一月に東京府知事に出した、長文の徴兵猶予の「願書」が収録されている（二五六―二六三頁）。

- (22) 新島襄の徴兵猶予特典要求運動 および「准官立」構想については、田中智子「官立学校」の輪郭―近代日本教育制度形成期における概念とその周縁」（『人文學報』、九九号、京都大学人文科学研究所、二〇一〇年、三一―六〇頁）の、特に四一―四八頁に詳細がある。田中は、明治十六年の徴兵令にある「官立学校」に関して、新政府の人々の間にも定見がなかったと指摘している。

- (23) 前掲「東京日日新聞」、注5参照。

- (24) 徳富前掲「蘇峰自伝」、一八四―一八五頁を参照のこと。  
(25) 『同志社大江義塾徳富蘇峰資料集』（花立三郎、杉井六郎、和田守編、三一書房、一九七八年）五三三頁。以下、「大江義塾資料集」とし、文中にページ数を記す。

- (26) 徳富前掲「蘇峰自伝」、一八五頁。  
(27) 上田充については、前掲花立「大江義塾―民権私塾の教育と思想」、二二―二三五頁に詳しい。

- (28) 不思議なことに盈進小学校で阿部が教鞭を取っていたことについては、大江義塾の記録には出てこない。徳富の「蘇峰感銘録」に言及があるのだが、花立は一九七一年に宮之城で、阿部に小学校で教えてもらったという話を先輩から聞いたという人物に会っている（花立三郎「実学党と宮之城」、『近代熊本』、第一三三号、熊本近代史研究会、一九七一年）五頁。なお、阿部の小学校奉職に何らかの具体的な不都合が出ていたという史料は見当たらない。

- (29) 阿部充家の娘である阿部光子（山室光）のご子息である山室建徳氏（帝京大学経済学部教授）によると、幼いころに母から聞いた話によると、阿部姓になったのは「徴兵逃れ」の

教育学部門、五八号、二〇〇三年、六五―七三頁）を参考のこと。

- (37) 花立前掲「大江義塾―民権私塾の教育と思想」、五三頁。

- (38) 徳富前掲「蘇峰自伝」、二〇八頁。

- (39) なお、十八年初めから義塾の財政難を救うために寄付が呼び掛けられたが、その合計は六六円であった。花立前掲「大江義塾―民権私塾の教育と思想」、五一頁参照。済々黈への寄付については前掲「新熊本市史」、九二―九五頁に、年間支出額については星野前掲「私立「大江義塾」の教育活動とその特質」、三九頁に記載がある。

- (40) 『第十九世紀日本の青年および其教育』は改変されることなく、明治二十年四月に「新日本の青年」と題した小文を巻頭に付けて、「新日本の青年」として商業出版された。  
(41) 徳富猪一郎「新日本の青年」（集成社、一八八七年）、一五頁。

- (42) 徳富前掲「新日本の青年」、一五一―一五二頁。

- (43) 『國民之友』明治二十一年十一月十六日、第三四号。テキストは、「國民之友」（複製版、明治文献資料刊行会編、一九六六―一九六八年）による。「同志社大学設立の旨意」は徳富が執筆したものが新島襄の名で発表された。現在でもほとんどの場合「旨意」は新島の言葉として紹介される（同志社大学HP等）。この理由として、キリスト教の聖書解釈が影響しているとみられる。新約聖書は使徒達がキリストの言行をまとめたものであり、使徒達は神の福音を伝える記者と考えられている。これをあてはめると、「旨意」を書く徳富は新島の言葉を媒介して文字にする筆者となる。なお、管見によればほとんど指摘されることがないのは、引用文中の「良心を手腕に運用する」というフレーズについてである。

これは新島の言葉として長く戦後の同志社教育で使われてきたものであるが、徳富の「新日本之青年」にオリバー・クロムウェルの言葉としてすでに使われている（徳富前掲「新日本之青年」、一〇頁）。

(44) 但しここで徳富が言う「同志社」とは新島襄の教育理念が具現化した理想形の学校であり、京都にある実際の英学校や在校生、卒業生たちの集団を必ずしも指すものではない。

(45) 杉井前掲「民友社の成立とその背景」および、花立前掲「大江義塾——民権私塾の教育と思想」、六八頁参照。

(46) 「徳富蘇峰民友社関係資料集」（民友社思想文学叢書、第一巻、編集・解説、和田守・有山輝雄、三一書房、一九八六年）六九頁。人見一太郎（一八六五—一九二四）は熊本県宇土出身で、熊本師範学校を出た。徳富の土佐行きや土佐から東京への旅行にはつねに随伴している。「仲間では人見氏を、徳富の秘書と稱してゐた」とのことである（徳富前掲「蘇峰自伝」、一一六頁）。前掲「肥後人名辞書」の徳富による「人見一太郎」の項参照。

(47) 義塾関係者で、その後、民友社や国民新聞社で働いた人々には、阿部の他に、人見一太郎、草野門平、奈須（内山）義賀、野村朴、梶原保人、大迫（宮島）真之、山川瑞三らがいる。戸田（緒方）直清は民友社に入ったが、病の為若くして死んだ。

(48) 花立前掲「大江義塾——民権私塾の教育と思想」、二一九頁に戸波の略歴がある。

(49) 徳富宛人見一太郎書簡参照（明治十九年九月十四日付「関係文書」一、一六五頁）。大江義塾が閉じられて以降、阿部は戸波からの近況報告を待っていた。「戸波兄未だ出熊せず。同氏母宅には昨夜あへり。元氣宜し。」（明治二十年七月

十九日、「関係文書」三、二二頁）。「戸波兄未だ面会せず。先日來屢招待にあづかり候得共未だ其開を得ず。それ故未だ接膝緩話の快を欠き居り申候」（明治二十一年二月十五日人見一太郎宛、「関係文書」三、二七頁）。「戸波兄今日書状來り元氣の由御同慶申候」（明治二十一年三月十七日、「関係文書」三、三三三頁）。

(50) 国立国会図書館憲政資料室、阿部充家関係文書、三三三九、戸波易治書簡。末尾に「明治二十三年十一月十七日、浮浪散人易治」とある。文中「葉」とあるのは、山中で歩く際に目印として枝を折ること、またそのようにして折られた枝のことである（「指折り」の意）。戸波も病がなければ、おそらく民友社等で活躍したと考えられる。

(51) 星野前掲「私立「大江義塾」の教育活動とその特質」、四五頁、および天野郁夫他「近代日本における学歴主義の制度化課程の研究——笹山鳳鳴義塾を事例として——」（『東京大学教育学部紀要』、二七号、二二—二五〇頁、一九八八年）三〇頁参照。